

# 『赤心の鎖』

青木 明日香

## 第一章 夜空の雫

(1)

風呂から上がった田丸勇次郎は縁側に座り込んでぼんやりと庭先を眺めていた。こぼれ落ちるような下弦の月の輝き。辺りに響く火鉢の炭がはせる音。少し火照った身体をなでる冷やかな夜風。目に映るもの、鼓膜を震わすもの、肌を感じるもの。それらのすべてが父と過ごした時間と交錯する。

勇次郎は、まとまった金を包んだ風呂敷を抱えていた。ついさっき入ったばかりの収入だ。「今から島原に遊びに行くんだけどな、勇次郎も行かねえか？」

振り返ると、そこには満面の笑みでしゃがみこんだ仲間がいた。この男だけでなく、金が入って皆が舞いあがって騒いでいた。

「せっかくやけど、俺は遠慮しとく。脇差が欲しいしな、実家にお金送ろうとも思うてて」誘いを断ると、彼は「オマエは真面目すぎるんじゃ」と顔をしかめて踵を返した。

「ホンマ、堪忍。今度俺も一緒に行かせてもらおうし」

「今回だけだぞ」

部屋の片隅にぼつんと置かれた刀が薄暗い部屋に浮かんで見えた。部屋に差し込む月の光を背中に浴びながら、勇次郎はゆっくりと目を閉じた。

右手にかかるかすかな重み。鼻につく鮮血の匂い。青ざめてゆく顔。暗闇の中で脳裏によみがえるのは、忘れてしまいたい光景の記憶ばかりだ。もう一度、父のいたあの時間に戻れたら……。何度そう思ったことだろう。もしも父が、自分のとった行動を知ったらどう思うだろうか。優しく笑ってくれるだろうか。

そういえば父が殺された時も、あの時でさえも、空はおかしいくらいに晴れ渡っていた。

(2)

一八六三年、冬。勇次郎は、京の中心地から少し外れたところにある下岡崎という地域で暮らしていた。

「もうじき新月になりそうや。大根採りに行かなあかんや。勇次郎、オマエも手伝え」

父が小屋の入り口から空を覗きながら言った。その視線の先には、見えるか見えないかくらいに細く輝く月があった。新月とともに、大根の収穫の時期が近づいていた。

「えっ、俺もですか？」

両手いっぱい薪を抱え、勇次郎は一瞬、表情を曇らせた。家の畑で育てている大根は、一本で一貫(約3・75キロ)を超える。去年、大根の収穫を手伝ったとき、全身が筋肉痛